

1 汚斑病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は、菌糸や胞子の形で被害植物について越冬し伝染源となる。本病は、生育中～後期に肥料切れを起こした場合に多発する傾向にあるので、たい肥などの有機物を十分施用して地力を保ち、施肥管理に留意する。
- 2 薬剤防除法がないので耕種的防除に重点をおく。

B 耕種的防除法等

- 1 発病の多いところでは抵抗性品種を用いる。
- 2 たい肥などの有機物を十分施用して地力を保つ。
- 3 基肥には緩効性肥料を活用するとともに追肥にも留意し、肥料切れにならないようにする。

2 乾腐病

A 生態と防除のねらい

- 1 土壌及び種いもにより伝染する。病原菌は、り病いもの残さとともに土中に残り、また土壌中における生存期間が長く、4～5年後に作付しても発病することがある。このため、収穫時にはり病いもをできるだけ除去し、ほ場の衛生管理に努める。
- 2 種いもとして親いもを用いると伝染の危険性が最も高く、次いで子いも、孫いも、ひ孫いもと低くなる。

B 耕種的防除法等

- 1 健全いもを使用するが、できれば孫いもを用いる。
- 2 輪作は必ずしも有効ではないが、サトイモを休閑する期間はできるだけ長くする。
- 3 り病いもはできるだけ除去し、ほ場に残さない。

3 黒斑病

A 生態と防除のねらい

- 1 主として種いもが伝染源のため、種いも消毒を行う。また病原菌は、り病いもなどとともに土壌中に残り、土壌伝染する可能性もある。
- 2 出荷輸送中の発病を防止するため、掘り取りや選別時にいもを傷つけないようにするとともに、発生の多い夏秋の出荷は低温輸送にすることも防除対策の一つとなる。

B 耕種的防除法等

- 1 発病ほ場からは種いもをとらない。
- 2 無病いもを選ぶ。
- 3 発病した催芽床の土は翌年使用しない。
- 4 掘り取り時及び選別時にいもを傷つけないようにする。

4 疫病

A 生態と防除のねらい

- 1 病徴は葉や葉柄、いもに見られる。葉での症状は、はじめ円形～楕円形の黄褐色の斑点ができる。斑点が多くなると、褐色の同心輪紋のある大病斑となる。病斑は破れやすい。ひどくなると葉柄が褐色、黄変し、葉は枯死する。
- 2 り病した種いもや、ほ場に放置されたり病屑いもなどは伝染源になる。
- 3 春から秋に発生し、特に、比較的低温で多湿の時に発生しやすい。雨天が多いとまん延する。

B 耕種的防除法等

- 1 健全な種いもを用いるとともに、収穫後は被害残さの処分を行う。
- 2 排水対策やほ場の衛生管理を行う。

5 軟腐病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原細菌は、アブラナ科植物の軟腐病と同一で土壌伝染が主であるが、種いもによっても伝染する。健全な種いもを使用するとともに被害残さの処理などほ場の衛生管理に努める。
- 2 土壌の過湿が本病発生の誘因となるので、過度のかん水を避け、多雨期にはほ場の排水にも留意する。

B 耕種的防除法等

- 1 過度のかん水を避ける。
- 2 多発地でのマルチ栽培は透明プラスチックマルチを避け、黒色プラスチックマルチを用いる。
- 3 窒素質肥料の多用を避ける。
- 4 被害残さの処理などほ場の衛生管理に努める。

6 ウイルス病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原ウイルスは、キュウリモザイクウイルス（CMV）及びサトイモモザイクウイルス（DMV）が知られている。CMVはアブラムシにより伝搬され、種いもによる伝染の可能性は少ない。一方、DMVは種いもによって伝染する。
- 2 CMVについては、ほ場周辺の伝染源となる植物をできるだけ除去するとともにアブラムシの防除を行う。DMVは種いもの更新などにより無病の種いもを用いるようにする。

B 耕種的防除法等

- 1 CMV
 - 1) プラスチックシルバーフィルム等によるマルチ栽培を行う。
 - 2) 多発地では石川早生など発病の少ない品種を栽培する。
- 2 DMV
種いもの更新を行う。

C 薬剤防除のポイント・注意事項

媒介虫の防除（虫害アブラムシの項を参照）

7 ハダニ類 (カンザワハダニ)

A 生態と防除のねらい

- 1 主にカンザワハダニが発生する。
- 2 梅雨が明けてから急激に増加し、8月中、下旬にピークがみられ、9月下旬を過ぎると減少する。
- 3 増殖が著しく早く、夏季の高温時には、10日間ほどで卵から成虫になるので、葉にわずかでもカスリ状の退色部がみられたら防除する。

8 アブラムシ類 (ワタアブラムシ)

A 生態と防除のねらい

- 1 主にワタアブラムシが発生し、CMVを伝搬する。
- 2 生育中～後期の6～9月にかけて葉裏、新芽などに群生し加害するので、多発しないうちに防除する。

9 ハスモンヨトウ

A 生態と防除のねらい

- 1 夏季が高温乾燥に経過する年は早くから発生するので、卵塊及び被害葉に注意する。
- 2 老熟幼虫は薬剤の効果が劣り、また、日中は暗い所にかくれて薬剤がかかりにくくなるので、初期の若齢幼虫を対象に防除する。